
殺される俺

@kana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺される俺

【Nコード】

N1651E

【作者名】

@kana

【あらすじ】

殺される俺。腕を振り下ろす彼女。もう戻れない現実。俺は……
本当に死んでしまうのか？いつものように暮らしていた俺が、地獄の底に突き落とされる。

殺される俺（前書き）

この小説には、グロテスクな表現がされています。
苦手な方はお引き取りください。

殺される俺

「お前なんか死んじまえばいいんだあ！」
夜の公園に叫び声と呻き声が響き渡った……。

どうしてこうなった？

過去を振り返る暇もなく、振り下ろされるその腕。

俺はただ、何者かに怯える彼女を救いたかっただけだ。

……なのに……なのに……どうしてこうなってしまおう？

自分は、必死に腕を振り下ろす彼女をただ見つめていた。

この距離だと目を見る事も簡単なはずだが、俺は啞然とその場に
いるだけだった。

いつの間にか、頭が真っ白になって何も考えられなくなった時だ
った。自然と痛みはなく、血が出ているのさえ気づいていなかった。
彼女はまだ、腕を振り下ろしている。

俺は殺されてしまうのか？

頭に思い浮かんだ言葉は、自然と俺を安心させてくれる言葉だっ
た。

もう、キミを助けることは出来ないけど彼女を救うことは出来る
はず。

だから……俺は彼女に殺されよう。

俺はゆっくりと目を……睨った。

霧の中で聞こえる声

目覚めると、周りは霧だらけだった……。

どうして俺は……生きているのだろうか？

本当は死んでいて、自分は幽霊になってこの世を彷徨さまよっているんじゃないか？ だって俺は……殺されると決めたのだから。

幽霊になつていいると思うのは、やけに身体が軽いからだ。現実じやありえないくらいに、軽くて、身動きがとりやすかった。

「霧が濃くて、何も見えないな……」

俺は辺りを見回した。だが、俺を包むような霧が景色の邪魔じゃまをしてここがどこだか分からない。

「ちくしょう……」

俺はしばらく歩いてみたが、どんなに歩こうと霧は俺に引付くように消えなかった。

どうしようもなくなって、歩くのを止めた俺はその場であぐらをかいて俯いた。

俺はどうしてここにいるんだ？

まず、ここになぜいるのかを考えてもみるが、まったく検討がつかない。

誘拐されたのか？ いや、でも誰がこんな所に？

考えれば考えるほどに、頭が混乱してきた。

「ああ！ もうやめた……！」

俺は、嫌になって大の字に寝転がって霧で何も見えない空を見上げた。

「一体どうなつてんだよ……ここ」

目を瞑って、何も見えなくなると何か聞こえてくるような気がした。なんだろうか、人間の囁ささきにも聞こえてきた。

……てよ……

だんだんその声は、はっきりと聞こえてくるようになったきた。

「てよ……？」

俺はその体制を崩さないまま首をかしげ、呟いた。

……助けてよ……

助けてよ？

心の中で、繰り返し、俺は瞑っていた目を開けた。相変わらず、霧は晴れてはいないが「助けてよ」という幼い少女のような声が繰り返し耳に届いてくる。

気味が悪くなった俺は、上半身を起こし、声の主に思いっきり叫んだ。

「誰だよ……！」

すると、その声は俺の叫び声に怯んだようにピタリと止まった。

「返事しろよ、聞こえてるだろ！」

すると、幼い少女のような声が返ってきた。

私が……わからないの……？

この声の主の言葉に俺はちょっとだけカチンときた。こっちが質問をしているのになんで質問を返してくる理由が分からなかったからだ。

「分かるかよ！」

すると、霧で覆われていた前方からゆっくりと晴れていくのが分かった。それでも景色は白かったけど、それと同時に裸足で床を歩く音が聞こえる。

生睡を飲み、心臓を速く波立たせて、その人物が霧から現れてくるのを待った。

……私だよ……？

霧の中から現れたのは、髪長い少女だった。着ている白いワンピースはもうボロボロで所々に赤黒く染みがついていた。あれは、血なのだろうか？

「誰……だよ」

少女の姿を見ても、俺は驚きはしなかった。ただ、この子が誰なのか気がかりだった。すると少女は、ニコツと気味悪く微笑んだ。

私だよ……

少女の声から出るとは思えない、低い声が、俺を震わせた。

そうだ、俺はこの子を知っている。

俺は、この子の正体が分かると、すぐに立ち上がって後ろに三歩下がった。それと同時に少女も俺に三歩近づいた。

「な、何でお前がここに……」

少女はまた、微笑んでこう言った。

何言ってるのよ……あなたがここへ来たんじゃない

「どういう意味だ！」

少女はクスクスッと笑った。

「何がおかしい！」

そりゃあ、おかしいよ……だってあなたは殺されに来たんじゃないの？

そうだ、落ち着け、落ち着くんだけ俺……。

自分を言い聞かせ、深呼吸をした。

「しらねーよ、第一お前はここにはいないはずだろ！」

どうして？ あなたがここに来たのに？

「うるせえ！俺は自分からここへはきてねーよ」

少女はしらけたように俺を見つめると、ポケットからある一枚の写真を取り出した。当時、通っていた学校の教室で撮ってもらった一枚の写真。そこには、俺とその他に女子二名と男子二名が写っている。ここに写っているメンバーは、いつも一緒にいて、本気で喧嘩ができる仲間だった。

これ、なーんだ？

その写真を見た瞬間、頭にあの映像が流れ込んできた。

「やめる！」

どうしてだ？ どうしてお前がその写真を持っているんだ？

破いても、いいかなあ……

少女はその写真を破こうとする。俺は少女に向かって叫んだ。
「やめろおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」
俺は、頭を抱えてその場にしゃがみ込んだ……。

フツと目を開けると、見慣れた自分の部屋の天井が目に入った。
霧はない。

「また……夢か……」
起き上がると、随分汗ずいぶんをかいている事に気がついた。

ここ最近、このような夢ばかり見て俺は悩んでいた。……いや、
ここ最近ではない。あの、事件が始まってからだ。

俺は溜め息をつくくと、ベッドから離れ、一階へ降りようとドアノ
ブに手をかけ、思いとどまった。

そういえば、カーテンを開けていない。

俺は、手をドアノブから離すと、灰色のカーテンを乱暴に開けた。
強い日差しが部屋中に入り込んできた。普段開けない窓を開けると
心地よい春風が俺を優しく吹いてくれた。

「利穂……ごめんな……」

俺は、空を見上げるたびに利穂を思い出しては……虚むなしくなった
……。

平和な日々

俺達はいつも、五人でいた。

さいじょうゆたか
西条豊の俺。

中学生にしては生意気な金髪の不良、さかくちゆうた坂口裕太。

引っ込み思案で、おどおどしているのが特徴的ないちやなぎたかのり一柳孝則。

明るく、活発な俺たちのリーダー役のような女子、いしおかりほ石岡利穂。

最後に、クールで何事にも冷静なあきたさへか秋田彩佳。

どんな事があるうとも、俺たちは決して離れはしなないと思っ
た……。

寒すぎた季節を通り過ぎ、ようやく桜の季節がやって来た。

そんな中で俺たちは、幸せすぎる日常を繰り返して過ごしていたの
だった。

「豊！」

昼休みの予鈴がなると、教室の入り口で俺の名前を呼ぶ利穂が目
に入った。

俺はすぐに、利穂の用事が分かった。

「いつもの場所に行つて」

そう利穂に伝えると、利穂は微笑んで頷いた。そして、俺は利穂
を追うように教室を出て、利穂が向つていった逆方向に足を進めた。
鼻歌を歌いながら俺が向うのは、売店だった。いつもなら通れな
いくらいに生徒がいるのだけれど、それは人気メニューの時だけだ。
俺は、好物でもあるあんぱんを手に入れると『いつもの場所』へ

と向った。

三階の階段まで来ると、右手に古びた扉がある。

そこを開ければ、薄暗い階段が続いていて、その先に行くともう一枚扉がある。それも同じく開けると、春の風が俺を優しく包むように風が迎える。

そう、ここは屋上。

「おー！ 豊、遅いじゃん！」

手すりに寄りかかっていた裕太は、俺が入ってくるのを見つけると大声で手を振った。

その裕太の動作に、地面に座って早速ご飯を食べている利穂と彩佳もこちらを向いた。

ただ、孝則だけはみんなと三十センチほど離れた場所で屋上から見える街の方を向いていた。

「わりー」

俺も、駆け足でみんなの所へ行く。

「何、今日もあんぱん？」

俺の手にあるあんぱんを指差し、利穂は笑った。なんとも馬鹿ばかにしているような笑い方だったから、ちよつとムツと来た。

「何だよ、これじゃ駄目なのか？」

落ちるようにその場に座り、あんぱんを口にする。

「いや、よく飽きないものだなあって思ってたさ」

ちよつと強めの風が吹いて、利穂の長い黒髪が大きく揺れた。彩佳の髪も利穂よりは長いが、赤茶に染められて邪魔じゃまにならないように、結ばれている。

「あ……」

いきなり、裕太が何かを思いついたかのような声を出した。

俺たち四人は、裕太に視線を向ける。

「そうそう、豊……お前、知ってるか？」

知っているか？ と聞かれて、大抵の人は答えられないだろう。

「知っているって、何？」

裕太は一瞬、思い出せそうで思い出せない表情をして、ついに何かを発言すると思ったら、

「何言おうとしたか忘れたわ」

と、なんとも間拔まぬけな答えが返ってきた。

俺は呆れて、何も口に来れなかった。

そこで、今までずっと黙っていた孝則が口を開いた。

「……一昨日の、事件の事じゃないかな」

相変わらず、ボソボソと喋る癖は直ってはいなかった。

俺と裕太と孝則と彩佳は元々同じ小学校で、特に俺と裕太は特別仲が良かった。

孝則と彩佳は特別仲が良かったというわけではないのだが、中学に入って利穂が現れ、彩佳は利穂と仲良くなり始める。

そして裕太が、利穂に恋心を芽生えさせ、カモフラージュに孝則を仲間に入れた。

そんな微妙な関係を保ち続けて、約一年。俺たちはいつの間にかいつも一緒にいた。

「事件？」

利穂もそのことについて首をかしげた。彩佳はただ、不思議そうに孝則を見ているだけだった。

そこで、ようやく裕太が思い出したようだった。

「ああ！ そうだそうだ」

「何だよ、事件って」

俺が尋ねると、裕太は口元を緩ませた。

「この街で、一昨日事件があったんだよ」

「何の？」

利穂が問うと、裕太はちょっと間を空けてこう答えた。

「殺人事件のだよ」

殺人事件の噂

「殺人事件？」

俺が、そう聞き返すと裕太は怪しく笑いながらこう言った。

「そう、なんとも不気味な殺人事件だったらしいぞ」

そこで、どうでもよさそうに彩佳は口を挟んだ。

「その被害者は、頭部を切断されそのまま見つかっておらず、足は潰されたかのように引きちぎられている。胸のあたりには、何度も刃物で刺されたような傷が残っており、方から腕にかけては裂けていた……」

彩佳は口を閉じると、ご飯を口の中に入れた。

「彩佳、何でそこまで知ってるんだよ」

裕太の間に俺も同じ質問が浮かんできた。

「ほら、彩佳ちゃんはお父さんがお偉い警察官だから」

彩佳の代わりに、利穂がそう答えた。そう聞いた俺と裕太は心底驚いた。

「何だよ、そんなの初めて聞いたぞ」

裕太が彩佳に向かってそう言うと、彩佳は利穂を睨むように口を開いた。

「利穂、言わない約束だったでしょ」

「あ……ごめん……」

利穂は反省したように、肩を落とした。

「なあ、どうしてそんな隠すんだよ」

俺が、彩佳に訊ねると彩佳は弁当箱を片付けながら俺の質問には答えなかった。無視された俺は、しつこく同じ質問をする。

「おい、聞いてるか？ なんだだよ」

彩佳は自分の荷物を纏めると素早く立ち上がり、そのまま扉を開け、出て行ってしまった。

「何だよ……アイツ」

裕太が気分悪そうに舌打ちをした。

「あのね、彩佳ちゃんにとって聞かれない事とかあるんだよ…

…」

彩佳が出て行った扉を見つめながら、利穂は優しく言った。

「この時俺は、誰にでも聞かれないことはあるんだと、改めて実感した。」

連続殺人事件

あなたの細い髪の毛、つぶらな瞳、滑らかな口元、全部あなたの事が好きだった。

でも、今こうして見ているのはどうだろうか？ 何とも醜い姿になってしまっている。そもそも、自分の握っているこの刃物が悪いのだ。こんなものをいつも持ち歩いているからダメなんだよ、きつと。

自分はあなたを死ぬほど愛していた。あなたがいない世界なんてつまらない。でも、自分もそっちへ行こうとは思ってもしない。だって、あなたが悪いのだから。自分の気持ちを裏切るような行動を取ったあなたが悪いのだから。

そのすぐ、足の横には見るも無残な姿となった人と思われる塊があった。見ただけでは男か女かも分からないぐらいに、切り刻まれていて血の海となっていた。

犯人と思われるその人物の手に握られている刃物から、血と思われるものが一適一滴、ゆっくりと地面に落ちていった。

そして、その犯人と思われる人物はゆっくりとその変死体から離れていった。犯行に使ったと思われる刃物は、置いては行かずそのままぎつちりと手に握っていたのだった……。

よく見ると、その変死体の右腕に、文字が深く刻まれていた。

その、死体の人物に送るメッセージのように。

もしも、あなたに自分が敗れるというのならば……

自分は殺されるまで逃げ続けます。

その文字の刻まれた腕についているはずの手首は、死体が発見させられても、まだその手だけは見つかっていなかった。

二人だけの秘密

五限目の授業が終わり、残りあと一時間だ、もう少し頑張れ自分！と、久しぶりの授業に肩がこってしまった。

「利穂、ちよつといい？」

自分の肩を手で揉みながら、目の前で、私を見下ろす彩佳を見上げた。

私は、授業の事なんか全く忘れてこう返事をした。

「うん、いいよ。どこで話すの？」

彩佳は、戸惑った表情を見せたが、すぐに元の顔になりこうボソリと呟いた。

「いつもの場所」

私たちにとつて、いつもの場所はかけがいのない場所であつて、なくてはならない特別な場所だつた。だから、授業をサボる時もお昼も、そのいつもの場所で溜まっている。私たちが通っているこの中学校の屋上は、なぜか誰も使わない。ただ、私たちが入学する前の何年か前に飛び降り自殺があり、一時立ち入り禁止になつてから、夜にその飛び降りたはずの生徒がいるとか何とか噂が飛びまくり、ついには立ち入る生徒もいなくなつてしまつたという訳だ。

実際、私たちは夜もここに来る様なことはあるけれど、そんな生徒は一度も見たことがないので、ただの噂が歩いていただけだつた。「で、どうしたの、話つて。彩佳からのお誘いは珍しいね」

屋上に着いた私は、手すりに寄りかかった。彩佳はその私の隣で、コンクリートに座つた。

「そうだね」

そう言つた彩佳はどこか哀しい顔をしていたような気がした。上から覗くような感じだから、よく見えないけど。

「あのさ……」

彩花がゆっくりと切り出した。

「あのね、私……好きな人が出来たの」

私は特に、この相談には吃驚はしなかった。中学に入って、同じクラスになった彩佳は、丁度私の後ろの席だった。隣町から引越してきた私は、誰も知っている人がいなくてとても不安だった。そんな時に、分からないことがあつて尋ねた時に、冷たい態度を取られた。彩佳の第一印象は最も最悪だった。だけど私はめげずに頑張つて話しかけると、彩佳も私に少しは心を開いてくれたのか、とてもいい人だと私は感動した。

それからというもの、私と彩佳は何でも相談しあつて、よくお互いのことを知っているつもりだ。

「へえ、また年上？」

その陽気な私の質問とは反対に彩佳は物静かに答えた。

「違う、同じクラスの男子」

その答えを聞いた私は、ある人物が浮かんできた。

「分かった、豊でしょ？」

私は怪しく笑つて見せると、彩佳はまるで何で分かったの？ という驚いた表情を見せ、私を見上げている。

「凶星だね」

私は、おかしくなつて声を上げて笑つた。だけど心の奥底では、どこか息苦しいものを感じてしまった。彩佳は可愛らしく頬を薄ピンクに染めている。そんな彩佳を横目で見ながら私はこう囁いた。

「豊は好きな人いるのかな？」

「え……」

私の囁いた言葉が彩佳にどう届いたのかは分からない。だけど、眉を寄せてただ私を見つめる彩佳はどことなく、恋する乙女だった。「もしかして、利穂も好きなの？」

「何、違うよ」

彩佳はこうみえても、勘のいい子だなと思つた。私は心に強く決心した。これでいいのだと自分に言い聞かせた。彩佳は安堵の溜め息をついた。

「よかった……利穂はいつも私の恋を応援してくれるよね」

私は、恋より親友を選ばなくてはいけない。親友を傷つけてはいけない。だから、本当の気持ちを隠さなければならぬ。親友のため……。

「何で？ 応援するのはあたりまえじゃない？」

今、私はどんな顔をしているのだろうか？ 無理に笑っていることが彩佳には見えませんように。

「ありがとう」

どうやら彩花は私の気持ちには気づいていないみたいで、彩佳にとってその言葉はとても珍しかった。

「どういたしまして」

ああ、神様どうかお願いします。

この素直な気持ちはどこへ捨てたらいいのでしょうか？

そつと小さく心の中で呟いた。

「ねえ、利穂？」

「何？」

私は、立ち上がった彩佳の顔を見る。彩佳は優しく微笑んでいた。「これは、二人だけの秘密にしようね？」

その時の、彩佳の微笑みはまるで私を脅すかのように約束を進めた。初めて彩佳の微笑がこんなにも私を怖がらせるなんて思いもしなかった。

「どうしたの、利穂」

私の異変に気づいた彩佳は、顔を覗くように優しく問いかけた。その一言一言が、私を何かの術で縛るように、私は動けなかった。

「何でもないよ」

「そう？ じゃあ、二人だけの秘密ね」

なぜか私はこう思った。

もう、二度と彩佳に近づきたくない。

いつも一緒にいて、いつも話していた。だから、彩佳の事は全部とは言えないけど知っているつもりだった。普段はムスツとしているのが彼女の特徴で、五人でいるときは滅多に口を開かない。そんな彩佳は私に少しは心を開いてくれていた。だからこうして、たまに微笑んでくれる。笑いかけてくれる。そんな彩佳が大好きだった。だけど……

どうしてだろう？　こんなにも、彩佳が嫌いになったのは初めてだった。

「うん、二人だけの……約束ね」

その時、授業を終える予鈴が学校中に響き渡った……。

裕太の想い

「豊」

俺が始めて恋をしたアイツは……西条豊のことを下の名前で呼びやがった。

「ねえ、新鮮でいいでしょ。豊って呼ぶね」

豊は戸惑うこともなく、頷いていた。俺はただ、その様子を影から見守るだけで、何も出来なかった。声をかければよかったのかもしれない。でも、俺には見せた事のない笑顔でアイツは笑っていた。悔しかった。アイツの笑顔が欲しいのに、親友の豊がこの時だけ憎かった。

「どうしたの、坂口……」

いつもの場所で、雲を見上げていた時だった。聞きなれない声だったので、後ろを振り向くと、そこには普段はポニーテールに結ばれている髪の毛を下ろしている秋田彩佳の姿があった。

「別に……」

俺は、どうでもよさそうにまた目線を空に向けた。

「別にとって顔してないわよ、どうしたの？」

「どうもしてねえし……」

そういえば、こうやってちゃんとした会話を交わすのは、初めてかもしれない。ふだん、滅多に話すことのない秋田彩佳は、自分から声をかけるところなんて見た事もなかったから。だけど、俺に話しかけてきた時は吃驚などしなかった。言葉は悪いが、俺は実際、秋田彩佳がどうでもよかった。

「利穂のことだよな？」

秋田彩佳は、まるで何もかも知っているかのように、俺をつぶらな瞳でいつも見ていたのだろうか。

俺は、ちょっとだけ唇をかみ締めた。俺がその質問に答えなくて黙っていると、彩佳は口を開いた。

「あのね、私……西条が好きなの」

その言葉を聞いて少しは驚いた俺は、顔を下げそして、後ろにいる彩佳を見た。彩佳もずっと俺を見ていたのか分からないけど、目が合った。

「本当はね、利穂も西条のことが好きなのよ、だから……」

間を空けて、すぐに続きを言うのかと思っただら、中々言わなかった。

「だから？」

「だから……恋より親友を選ぶの」

哀しそうに微笑む彼女をみたのはこの時が初めてだった。むしろ、笑っているところさえ見た事がなかった俺は、こんな顔をする彩佳に驚かされた。

そして授業の予鈴が聞こえると、彩佳はそそくさと出口の方へ行ってしまった。

「おい、待て」

俺がそう呼び止めると、彩佳は振り向きもしないで「何？」と答えた。

「お前……もつと素直になれよ！」

後ろ姿の彩佳は鼻でフツと笑ったのが分かった。

「あなたに言われたくはないわ、それに、私に今後一切、指図しないで……今度私に指図したら……」

そこで一旦言葉を切ると、俯きながら呟いた。

「……わよ」

風の音と、彩佳のあまりにも小さい声で何を言っているのか分からなかったが……俺にはこう聞こえた。

殺すわよ

ただの気のせいだったかもしれない。だけど、俺はそう取った。

それは、まだ入学して……一カ月半が過ぎた頃の出来事だった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1651e/>

殺される俺

2011年2月3日02時23分発行